洋菓子職人としての技術と経験を生かして。

昭和31年（1956年）創業、大分を代表するお菓子の製造・販売メーカー『株式会社 菊家』。『菊家のお菓子』といえば、おやつに、贈答品に、節句のお祝いに……と、大分県民の生活の中で世代を超えて親しまれている存在ではないだろうか。

『菊家』の洋菓子職人として働く佐野勤さん（70歳）は福岡県朝倉市の出身。幼い頃から大好きだったお菓子の世界にあこがれて、中学卒業後、菓子職人の道へと進んだ。以来、福岡の菓子店などで技術を磨き、今から35年前に『菊家』に入社。職人としてお菓子をつくるのはもちろん、全国各地や海外で開催される物産展やイベントでの実演販売、大分のお盆の必需品である籠盛の販売なども任されていた。60歳で定年退職したあと、再雇用を希望し、現在は洋菓子作りの現場で働いている。

佐野さんが定年退職した当時に、『菊家』では65歳までの再雇用制度ができたが、現在は希望に応じて68歳まで引き続き雇用できるようになっており、ほとんどの人が継続勤務を希望して働いている。佐野さんのように69歳以上の雇用については、本人と会社との相談によって決められる。70代の元社員が繁忙期に臨時で働くことはあるが、再雇用で働き続ける70代は現在、佐野さん一人。佐野さんがいかに働くことに意欲的であるか、また、いかに会社に頼りにされている存在であるかがうかがえる。

お菓子のあま～い香りが漂う洋菓子工場を案内してくれた佐野さん。にこやかな笑顔に福岡なまりのやわらかい言葉、話していると思わずこちらまで笑顔になってしまう。そんな親しみやすいキャラクターが職場でも愛されているようで、工場内では会う人会う人に声をかけたり、かけられたり。

洋菓子工場は生地を作る仕込み部門、飾り付けなどをする仕上げ部門と大きく2つに分かれていて、佐野さんは両部門で仕事をしている。退職前と同じ現場で働いているが、再雇用で働くようになってからは「年齢に合わせて、自分には無理だと判断した作業はしないこと」を常に意識しているのだとか。

「例えば重いものを持つことや力が必要な作業は、今はしていません。失敗してやり直すことになったら、材料費も時間も無駄になってしまいますから。『この作業はしない方がいい』というのは、自分で分かるんですよね。作業内容をコントロールすることができてきたからこそ、今日まで働けているのだと思います。だから自分ができる範囲で、みなさんをサポートするかたちで働いています」

〝サポート〟といっても、現場を熟知している佐野さんならではの絶大なサポート力は貴重で、一緒に働く20代から40代の若い世代からの信頼は厚い。

年の離れた若い世代と仕事でうまくやっていくために心がけていることを聞いてみると、「ビアガーデンやバーベキュー、社内旅行やボウリング大会などのレクリエーションには参加するようにしています。世代にかかわらず、職場以外でのコミュニケーションは、一緒に仕事をしていく上でとても大切だと思いますね」という答えが返って来た。また、「みんなに迷惑をかけないように」という謙虚な思いから、新しく覚えることや大事なことは必ずメモをとっているという。実はこれ、入社以来ずっと続けている習慣なのだそうだ。

年齢を感じさせない佐野さん、洋服が好きで、毎日自身でコーディネートした服でバッチリきめて出勤する。帽子も好きでハンチングがお気に入り。また、70歳にして真っ赤な愛車を乗りこなす。いつまでもおしゃれを楽しむ心を忘れないのが、佐野さんの若さの秘訣（ひけつ）のようだ。

「目標は『もう来るな！』と言われるまで働くことです（笑）。実際には、働けない時が来たら自分自身で分かるんでしょうけど、それくらいの思いで働き続けたいですね」と、働き続けることへの熱い思いを茶目っ気たっぷりの笑顔で語ってくれた。

無理はしない。だから続けられる。

仕込み部門でいつも一緒に働いている若手スタッフたちと一緒に。

熟練の技でスフレ生地をリズム良く均等に型に流し込む佐野さん。

3

株式会社 菊家

佐野 勤さん（70歳）

かがやきシニア 最前線！

KAGAYAKI SENIOR